

近代期の日本における福祉思想の社会構造史(3)

—作業仮説と分析枠組みの検討—

The Social Structural History of Ideas of Welfare in Japanese Modern Period (3)

—An Examination of Working Hypothesis and Analysis Framework—

坪井 真 (作新学院大学女子短期大学部)

Tsuboi Makoto (Sakushin Gakuin University Women's College)

目次

1. はじめに	112
2. 作業仮説の検討	112
3. 分析枠組みの検討	115
3-1. 佐藤正英 (2003) 『日本倫理思想史』における倫理思想の概念	115
3-2. 「神」に関連する倫理思想の特徴	117
3-3. 「仏法」に関連する倫理思想の概要	117
3-4. 「天」に関連する倫理思想の概要	118
3-5. 「文明」に関連する倫理思想の概要	119
4. おわりに	120
5. 文献	121

要約

本研究は、近代期の日本で進展した福祉思想を研究対象に位置づけ、その共時的特徴（同時代の文化的・社会的側面から受けた影響）と通時的特徴（時系列の推移で変容した特徴など）を分析・考察する研究の一環として、作業仮説と分析枠組みを検討した。その結果、①宗教的エートスと「あるべき倫理」「ある倫理」の関係性（共時的特徴）、②「あるべき倫理」から「ある倫理」に変容する過程（通時的特徴）に係る作業仮説を導出した。また、分析枠組みは、倫理思想史の研究成果と関連事象に基づき、①古代から現代に至る時期区分、②倫理思想における

四つの様態（神・仏法・天・文明）という項目で構成した。

キーワード：福祉思想、宗教的エートス、ある倫理、あるべき倫理、倫理思想、
社会構造史

1. はじめに

本研究は、近代期の日本で進展した慈善事業・社会事業・戦時厚生事業の思想（以下「福祉思想」という）を研究対象に位置づけ、その共時的特徴（同時代の文化的・社会的側面に影響を受けた福祉思想の特徴）と通時的特徴（時系列の推移で変容した福祉思想の特徴ならびに継承された福祉思想の特徴）を分析・考察し、現代の社会福祉に「先行するさまざまな諸条件」（田中1990）の特徴や影響などを解明する研究（坪井2020a・2020b）の一環である。

このうち、現代日本における社会福祉概念と政策理念を分析・考察した研究（坪井2020a）では、①社会福祉概念の特徴、②改正社会福祉法（2018年4月1日施行）が示す政策理念の特徴、③改正社会福祉法が示す政策理念の倫理学的特徴、④改正社会福祉法に内在する思想的特徴を解明した。また、先行研究における史観の考察（坪井2020b）では、社会福祉史の分野で多くの業績を残した吉田久一の先行研究から、福祉思想に関する主要な研究成果（吉田1979・1989・2003）を取り上げ、史観を中心とした分析視座の特徴を考察した。

本稿は、以上の研究成果に基づき、本研究の作業仮説と分析枠組みを検討することが目的である。

2. 作業仮説の検討

上述のとおり、筆者（坪井2020b）は、社会福祉史の分野で多くの業績を残した吉田久一の先行研究から、福祉思想に関する主要な研究成果（吉田1979・1989・2003：以下、本稿では「先行研究（吉田）」という）を取り上げ、史観を中心とした分析視座の特徴を考察した。その結果、先行研究（吉田）は、宗教と福祉思想の関係性に着目しており、西洋と日本における文化的・社会的特徴が福祉思想の通時的特徴に影響を及ぼすという分析視点を重視していた。

一方、史観については、唯物史観を基盤としつつ、当初から下部構造と上部構造の相対性を重視し、「社会科学の方法論に基づく見方」と関連するヴェーバー（Weber, M.）の理念型（宗教的エートス）を論究しているが、社会科学的な史観の検討は今後の課題として残されている。

そこで本研究は、先行研究（吉田）から導出した分析視点に基づき、独立変数と従属変数で構成された研究設問を設定する。

【研究設問】

西洋と日本における文化的・社会的特徴は、日本における福祉思想の共時的特徴（同時代の文化的・社会的側面に影響を受けた福祉思想の特徴）と通時的特徴（時系列の推移で変容した福祉思想の特徴ならびに継承された福祉思想の特徴）にどのような影響を及ぼしたのか？（独立変数：西洋と日本における文化的・社会的特徴。従属変数：日本における福祉思想の共時的・通時的特徴）

また、この研究設問は、①先行研究（吉田）が着目する宗教と福祉思想の関係性、②先行研究（吉田）の課題として残された社会科学的な史観を検討する過程も包含している。そこで本研究は、下記のとおり、研究設問と社会科学的な史観に基づく命題を設定したい。

【命題】

[1] 西洋における文化的・社会的特徴（特に宗教）が日本の福祉思想を変容させた。

[2] 日本における文化的・社会的特徴（特に宗教）が自国の福祉思想を変容させた。

さらに上記の命題を作業仮説にレベル移行し、近代期の日本で進展した福祉思想の共時的特徴と通時的特徴を分析・考察し、現代の社会福祉に「先行するさまざまな諸条件」（田中1990）の特徴や影響などを解明するため、先行研究（吉田）が提示したヴェーバー（Weber, M.）の理念型、すなわち、宗教的エートスを分析概念に位置づける。

宗教社会学者の岩井（1994：21-22）によれば、ヴェーバー（Weber, M.）が考案した「理念型」（Idealypus）は、概念が「無限の多様性をもつ現実を一面的にしかとらえられない」という前提に基づき「多様な現実の中の諸特性から、主観的な価値や関心に従って、ある部分を『知るに値するもの』として選択し、それを研究者の観点に沿って論理的に矛盾のないように構成したモデル」をいう。

ヴェーバー（Weber, M. = 1989：141）は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において「宗教的信仰および宗教生活の実践のうちから生み出されて、個々人の生活態度に方向と基礎をあたえるような心理的起動力をば明らかにすること」を重視しており、その「考察の方法としては、宗教的思想を、現実の歴史には稀にしか見ることができないような、『理念型』として整合的に構成された姿で提示するよりほかはない。けだし、現実の歴史の中では明瞭な境界線を引きえないからこそ、むしろ徹底的に整合的な形態を探究することによって、はじめてその独自の影響の解明を期待しうるからだ」と論じてい

る。そして、引用箇所に記載された「心理的起動力」と「理念型」を連関する概念が「エートス」である。

岩井（1994：24・29）は「エートス」を「ある種の倫理が人々の内面に血肉化し、それが半ば無意識的に人々を特定の行動様式や生活様式へと駆り立てるような起動力」であると論じ、ヴェーバー（Weber, M.）による「宗教経済倫理」（世俗内的禁欲など）は「人々を経済行為へと向かわせる起動力としての宗教的エートス」であると述べている。このうち、岩井が示す「エートス」の定義は、先に筆者（坪井2020a）が本研究の重要な概念として位置づけた「ある倫理」と「あるべき倫理」に関連している。社会倫理学者の村田（2005：2-4）によれば、「ある倫理」とは「社会に定着し、存在する倫理」であり、「あるべき倫理」は「社会や集団の存続と改善のための条件」に位置づけられる。そして、村田が示す「ある倫理」と「あるべき倫理」の関係性は、下記のとおり、現代日本における社会福祉の実体概念と目的概念に対応している。

【現代日本における社会福祉の概念】

実体概念 [↔ある倫理]

人びとの生活課題を解決・緩和・予防するための制度・政策・実践。（英語表現の social welfare、social services、social work に類する概念）

目的概念 [↔あるべき倫理]

人びとが幸福な状態になることを目指している。（英語表現の well-being に類する概念）

つまり、社会や人びとの間に広く普及している価値観・倫理観が「ある倫理」だとするならば、「あるべき倫理」は社会福祉の目的概念や政策理念、実践者の価値観・倫理観に該当する。

前述したとおり、岩井（1994：24・29）は、ヴェーバー（Weber, M.）による「宗教経済倫理」（世俗内的禁欲など）が「人々を経済行為へと向かわせる起動力としての宗教的エートス」であると論じている。この「宗教経済倫理」同様、社会福祉においても岩井が定義した宗教的エートス、すなわち「ある種の倫理が人々の内面に血肉化し、それが半ば無意識的に人々を特定の行動様式や生活様式へと駆り立てるような起動力」は倫理の基盤に位置づけられる。何故ならば、本研究の命題を作業仮説にレベル移行するうえで宗教的エートスは「あるべき倫理」と「ある倫理」の関係性（共時的特徴）や「あるべき倫理」から「ある倫理」に変容する過程（通時的特徴）を分析する重要な概念だからである。そこで本研究は、下記のとおり、命題に基づく作業仮説を設定する。

【作業仮説】

- [1-1] 西洋の文化的・社会的特徴と関連する宗教的エートスは、近代期以降の日本に「あるべき倫理」として導入され、従来の福祉思想に影響を及ぼした。(目的概念の変容)
- [1-2] 近代期以降の日本に「あるべき倫理」として導入された西洋の宗教的エートスは、福祉思想の「ある倫理」として定着した。(実体概念の変容)
- [2-1] 日本の文化的・社会的特徴と関連する宗教的エートスは「あるべき倫理」として継承され、近代期以降の福祉思想に影響を及ぼした。(目的概念の継承)
- [2-2] 近代期以降の日本に「あるべき倫理」として継承された日本の宗教的エートスは、福祉思想の「ある倫理」として継続・発展した。(実体概念の継続・展開)

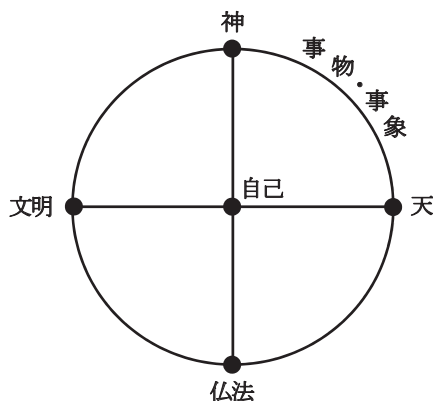
3. 分析枠組みの検討

以上の議論に基づき、本稿は、作業仮説に共通する概念、すなわち「思想」「宗教」「倫理」と関連する倫理思想史の先行研究（佐藤2003）をとおして、作業仮説の分析枠組みを検討する。

3-1. 佐藤正英（2003）『日本倫理思想史』における倫理思想の概念

佐藤（2003：11）によれば「自己が今・此処に現存している意味を問い、その問いに答えようとする営為が倫理」であり、「生きがいあるいは大きな目的」という「拠りどころ」が「私たちの現存を支えている」という。さらに佐藤は「拠りどころ」を「他物のなかでの自己の繫留点である。自己は他物とのかかわりにおいて存立している」と述べている。また、佐藤（2003：20）によれば「道徳や行為の規範は、時代や場処を問わず宗教と深くかかわってきた。文明開化以降もそのことに変わりはない。倫理学は、道徳や行為の規範や宗教の根底にあって、道徳や行為の規範や宗教を基礎づけ、存立させている私たちの営為の対自化である」という。そして「倫理をめぐる私たちの営為を言葉で捉え返した様態」が倫理思想であると論じている。佐藤（2003：25）によれば「倫理思想の領域は、自己をどう捉えるか、事物や事象をどう捉えるか、自己と事物や事象とのかかわりをどう捉えるかの三つの領域から成る。円の中心は自己をさし、また円の外縁は事物や事象をさしている。円周は自己とのかかわりにおいて現われる事物や事象の様態を示している。他物としての事物や事象は、わが国のひとつひとつにとって、大きくいって神・仏法・天・文明の四つの様態で現出した」という。(図1)

図1 自己とのかかわりにおいて現われる事物・事象の様態



※出典：佐藤正英（2003）「日本倫理思想史」 p.25

また、佐藤（2003：25-191）は「他物としての事物や事象の様態」が「事物や事象に対する自己の在りように対応している」と論じ、「四つの様態」の特徴を以下のとおり示している。

- ①神：情念としての衝迫に対応する事物や事象の様態 [古代：原初神道→近世：復古神道→近代：国家神道]
- ②仏法：作為としての抽象に対応する様態 [仏教の伝来→仏教の土着→仏教の成熟]
- ③天：持続への意志に対する事物や事象の様態 [武士の思想、儒学（朱子学・陽明学など）の思想、国学の思想、幕末の思想]
- ④文明：有用としての作為に対応する事物や事象の様態 [文明開化、国家の核としての天皇の創出、キリスト教の解禁]

さらに佐藤（2003：26）は「四つの様態」が現出した時代について、下記のとおり述べている。

神にテキストが突出して現われたのは古代であり、仏法にかかわるテキストは主として中古から中世にかけて現われた。天にかかわるテキストが突出して現われたのは近世であり、文明にかかわるテキストは主として近代に現われた。（中略）神・仏法・天・文明は、現われの形態がそれぞれの時代によって異なっており、そのことが各時代の思想的な特質を形づくっている。他方、神・仏法・天・文明は、自己の在りように対応する事物や事象の様態である限りにおいて、いつの時代にもなんらかの形態で存立している。神・仏法・天・文明は、事物や事象の様態として相互に拮抗し、排除しあうこともある。しかしつね

に排除しあうとはかぎらない。対立しつつ、濃淡の差異として連続的に変移する関係にある。

引用：佐藤正英（2003）「日本倫理思想史」p.26

以上の概念定義に基づき、佐藤は「四つの様態」における倫理思想を論じている。そこで本稿は、佐藤の議論を概観し、「四つの様態」における「思想的な特質」の共時的・通時的特徴を分析する。

3-2. 「神」に関連する倫理思想の特徴

佐藤（2003：27-55）によれば、原初神道における〈もの〉神は、人々が暮らす世俗世界に外在する他物であり、災厄（自然災害や疫病の流行など）という現象で現れる存在（崇り神）であったという。そこで災厄の発生を回避するため、祭祀がおこなわれた。やがて「〈もの〉神は、祭祀を介して、崇り神から豊穡と富裕と安穩をもたらす神へと変貌し、祭祀の担い手＝国の統治者となっていった。また、『古事記』や『日本書記』は「〈もの〉神を祀るひとをめぐる物語」が記されており、彼らは〈たま〉神とよばれ、祭祀の対象となったという。つまり、倫理思想の領域である「神」は、国の統治者（天皇）と〈たま〉神の関連性を重視している点が特徴である。

また、神道における「神」は、紀元前10世紀後半から紀元2世紀の弥生時代と関連している。民俗学者の設楽（2014）によれば、弥生時代は灌漑式の水稲耕作（以下「稲作」）という農耕形態により、人々の社会統合（稲作の共同作業や水田の共同管理など）が進み、身分階層が形成されたという。また、生業を継承する基盤として稲霊信仰が広まり、イエ（家）の存続を重視する祖先祭祀や氏族神信仰と結びついていった。このように稲作（つまり農耕）が人々の暮らしや社会・文化を変容する状態は農耕文化複合と定義される。よって、民俗学の知見に基づくならば、倫理思想における「神」は「情念としての衝迫に対応する事物や事象の様態」（佐藤2003：25）という特徴だけでなく、農耕文化複合という文化的・社会的側面の共時的・通時的特徴と関連しているのではないか。

3-3. 「仏法」に関連する倫理思想の概要

佐藤（2003：57-118）によれば、最初の仏教伝来は紀元6世紀中盤であったという。そして「釈迦仏」は「仏という名の〈たま〉神」として受容された。その後、仏教における「仏法」（慈悲の心）は、国を統治する朝廷の指針（民の利福を図ること）となり、仏教を担う僧は朝廷の官僚組織に組み込まれたという。

一方、朝廷の承認を得ずに出家する「私度僧」も出現した。その代表的人物が行基である。紀元7・8世紀に活躍した行基は、托鉢で施された物品を困窮している人々に提供し、架橋・道路整備や課役に従事する人々の宿泊施設も開設した。前出の吉田（2003：70-75）

によれば、王権（天皇）の賑給に連なる「施薬院」などの官僚的な救済制度と異なり、行基の「仏法」に基づく取り組みは、民衆のニーズ（生活課題や要望）を基盤とした民間の福祉実践であったという。

また、仏教学者の中村（1994：14-15）によれば「仏教が日本に渡来するとともに聖徳太子によって大規模に社会事業が展開せられ、その後断続の波はあったが、奈良時代・平安時代を通じて相当顕著に行われ、鎌倉時代には興生菩薩叡尊、忍性菩薩良観房などの献身的な活動」があった。しかしながら、近世は仏教者よりも「世俗の職業生活のうちに慈悲の精神を活かそう」とする人びとの活動が盛んになったという。つまり、中村の議論は、「仏法」の実践主体が通時的に変容しつつ、「あるべき倫理」として様々な社会階層の人々に共有されていた蓋然性を示唆しているのではないか。

3-4. 「天」に関連する倫理思想の概要

佐藤（2003：119-168）は「天」に関連する倫理思想として、「武士の思想」「儒学の思想」「国学の思想」「幕末の思想」を論じている。このうち、儒学は、紀元8世紀初頭に当時の朝廷が官僚制の理念に位置づけたという。佐藤によれば、その倫理思想（為政の理念）は「世俗世界におけるひとびとの利福である仁の実現」であった。その後、鎌倉時代に普及した朱子学を経て、儒学は官僚の倫理思想から、世俗世界は天によって覆われた世界（天下）であり、人々の秩序（社会階層）は天によって統括されるという思想に変容した。

一方、貝原益軒（1630-1714）は、理=仁（世俗世界におけるひとびとの利福）と考え、「『理』としての道徳は平等であるが、『天命』の自然秩序は、それぞれの個別の人間に現れると、人事界の貧富禍福はそのまま是認され、是認の上で救済が行われる」（吉田2003：151-161）という仁愛思想を提唱した。

また、国学は江戸時代中期に形成され、『古事記』や『日本書記』などを教説の根拠に位置づけている。このうち、本居宣長（1730-1801）は、古代の神々のはたらきに従う為政（古道）が理想であると提唱した。さらに平田篤胤（1776-1843）は、異国の事物・事象が古代の神々のはたらきの外部であり、世俗世界の天下に対して悪影響を及ぼすと提唱し、幕末の尊王攘夷運動における思想的基盤となった。

ところで哲学者のミシェル・フーコー（Foucault, M.=2000）は、中世・近世ヨーロッパ社会の「キリスト教の宗教的権力」すなわち「牧人=司祭型権力」が果たした「国家の形態の成立に重要な役割」と同時代における「日本の徳川幕府の政治体制の中で儒教が果たした役割」が類似していると指摘している。フーコーによれば「牧人=司祭型権力」が「宗教的であり、それが目指すのは、究極的には地上世界の問題ではなく、来世のことだ。しかし、儒教の役割は本質的に現世的である。また、儒教は、個人あるいは個人の属する社会的範疇のすべてに課せられるべき規則の総体を明確化することによって、社会全体の安

定を目標とする」点が特徴であるという。

さらに彼は「牧人＝司祭型権力」が「〈牧人＝司祭〉と〈羊の群れ＝信徒〉との間の、個人のレベルでの厳密な服従関係を確立」するために「魂の教導その他の技術によって、個人形成的であるのに対し、儒教にはそのような作用はない」と論じている。

換言するならば、「個人のレベルでの厳密な服従関係を確立」したヨーロッパ社会のキリスト教が「個人」を形成したのに対して、近世日本の政治体制下で「社会全体の安定」を重視する儒教の考え方は「個人」を形成する作用がなかったといえよう。つまり、「持続への意志に対する事物や事象の様態」という特徴をもつ儒学は、日本社会における「個人」の存立に関連しているのではないかと考える。

3-5. 「文明」に関連する倫理思想の概要

佐藤（2003：169-211）によれば「文明は、欧米諸国において体現されていた。文明の担い手は国家」であり、「明治政府は、新たな外部に抗するために、国家の構築を試み、在来の体制の再編成を図った」という。

周知のとおり、慶応3年12月9日に発布された王政復古の大号令は、新たに天皇中心の国家体制を企図する武家階級と公家階級の連合政権（以下、明治政府）に移行する宣言であり、国策として西洋諸国の政治・社会・経済・文化を導入し、近代化を図った。このように明治期以降の日本は、政府が近代化政策を進め、人びとを取り巻く環境が大きく変容した時代である。倫理思想の領域の「文明」は、このような通時的・共時的な特徴に関連しているといえよう。

たとえば、佐藤が「文明」の様態を体現した人物として取り上げた福沢諭吉は、1866（慶応2）年発刊の『西洋事情』において、①自主任意（Freedom or Liberty）、②信教の自由、③技術奨励、④学校教育、⑤政情安定、⑥貧民救済を「文明の要件」に列挙している。このうち、「自主任意」と「信教の自由」は、個人の権利・価値・倫理にかかわる要件といえよう。また、「貧民救済」はキリスト教の博愛精神に基づく慈善活動と関連している。

しかしながら、明治政府は、1868（明治元）年の「五榜の掲示・第三札」（キリシタン禁令の高札）や1870（明治3）年の「大教宣布の詔」発布（天皇中心の思想統制を図る神道の国教化）、1884（明治17）年の華族令制定等により中央集権国家体制を進め、福沢諭吉が提唱した「文明の要件」と異なる近代化政策を進めた。

つまり、当時の明治政府は、倫理思想の「文明」に内在する“文明開化”と“国家の核としての天皇の創出”を推進しつつ、「信教の自由」と関連する“キリスト教の解禁”は、欧米諸国からの圧力（外発的要因）および不平等条約改正（内発的要因）が1873（明治6）年のキリシタン禁令の高札撤去という政策転換により実現した。

この歴史的な事象は、「文明にかかわるテキスト」（佐藤2003）が現出した近代期の日本にお

ける人びとの宗教的エートスと政治的・社会的状況の関係性を示唆しているのではないか。

4. おわりに

本稿は、近代期の日本で進展した福祉思想を研究対象に位置づけ、その共時的特徴（同時代の文化的・社会的側面に影響を受けた福祉思想の特徴）と通時的特徴（時系列の推移で変容した福祉思想の特徴ならびに継承された福祉思想の特徴）を分析・考察し、現代の社会福祉に「先行するさまざまな諸条件」（田中1990）の特徴や影響などを解明する研究（坪井2020a・2020b）の一環として、作業仮説と分析枠組みを検討した。その結果、本研究における作業仮説は以下のとおりである。

【作業仮説】

- [1-1] 西洋の文化的・社会的特徴と関連する宗教的エートスは、近代期以降の日本に「あるべき倫理」として導入され、従来の福祉思想に影響を及ぼした。（目的概念の変容）
- [1-2] 近代期以降の日本に「あるべき倫理」として導入された西洋の宗教的エートスは、福祉思想の「ある倫理」として定着した。（実体概念の変容）
- [2-1] 日本の文化的・社会的特徴と関連する宗教的エートスは「あるべき倫理」として継承され、近代期以降の福祉思想に影響を及ぼした。（目的概念の継承）
- [2-2] 近代期以降の日本に「あるべき倫理」として継承された日本の宗教的エートスは、福祉思想の「ある倫理」として継続・発展した。（実体概念の継続・展開）

また、倫理思想史の先行研究（佐藤2003）に基づき、本研究の分析枠組みを検討した。その結果は表1のとおりである。

表1 倫理思想の領域と現出した時代

時期区分	神	仏法	天	文明
古代	原初神道			
中古～中世	↓	仏教		
近世	復古神道	↓	儒学・国学等	
近代	国家神道	↓	↓	西洋文化

※佐藤正英（2003）「日本倫理思想史」pp.25-26の引用箇所に基づき筆者作成

今後は、上記の作業仮説と分析枠組みに基づき、近代期の日本で進展した福祉思想を研究対象に位置づけ、その共時的特徴（同時代の文化的・社会的側面に影響を受けた福祉思想の特徴）と通時的特徴（時系列の推移で変容した福祉思想の特徴ならびに継承された福祉思想の特徴）を分析・考察する。

5. 文献

- Foucault, Michel (1978) 'La philosophie analytique de la politique' ('Gendai no Kenryoku wo tou') lecture at the Asahi Kodo in Tokyo, 27 April 1978, in: Asahi Jaanaru, 2 June 1978, pp.28-35. (=2000, ミシェル・フーコー著「政治の分析哲学」蓮實重彦・他監修『ミシェル・フーコー思考集成Ⅶ』筑摩書房)
- 岩井洋 (1994)「宗教社会学の源流—ウェーバーとデュルケムを中心に—」井上順孝編『現代日本の宗教社会学』世界思想社.
- 村田充八 (2005)『社会的エートスと社会倫理 (阪南大学叢書74)』晃洋書房.
- 中村元 (1994)「慈悲の精神」田宮仁・他編『仏教と福祉』溪水社.
- 佐藤正英 (2003)『日本倫理思想史』東京大学出版会.
- 設楽博己 (2014)「農耕文化複合と弥生文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』185, 449-469.
- 田中浩 (1990)『国家と個人』岩波書店.
- 坪井真 (2020a)「近代期の日本における福祉思想の社会構造史(1)—研究序説—」『作大論集』10.
- 坪井真 (2020b)「近代期の日本における福祉思想の社会構造史(2)—先行研究における史観の考察—」『作新学院大学女子短期大学部研究紀要』3.
- Weber, Max (1920) Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd.I, Tübingen (Mohr Siebeck) S. 17-206. (=1989, マックス・ヴェーバー著, 大塚久雄訳「プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神」岩波文庫, 白209-3, 岩波書店)
- 吉田久一 (1979)『社会福祉と諸科学 1—社会事業理論の歴史』一粒社.
- 吉田久一 (1989)『吉田久一著作集 1—日本社会福祉思想史』川島書店.
- 吉田久一 (2003)『社会福祉と日本の宗教思想—仏教・儒教・キリスト教の福祉思想—』勁草書房.